

631^P

倭国創建

る
 よう
 に
 見
 え
 た。

線
 上
 に
 、
 う
 っ
 す
 ら
 と
 一
 筋
 、
 何
 か
 か
 浮
 か
 ん
 で
 い

東
 方
 、
 船
 の
 舳
 先
 の
 遙
 か
 彼
 方
 、
 遠
 い
 遠
 い
 水
 平

であ
 った
 ろ
 う
 か。
 はる
 均
 等
 とお
 とお
 す
 い

島ま
か
し

4倍根號

4倍破線

7			
11			
10			
1			

あ
の
島

た
ろ
う
か

萬里の波

は
狂
壹

進人た。

*

祀(黑) 109° 15'
紀上 190° 經 3

記第 244 (原文)

$$\text{RE } 190^\circ$$

633^p

紀上190° ⊕ 3189°

＊かなり紛^まらわ^いい^か下

豊予海峡

(大分県佐賀県半)

とあつて、多少の違ひがみられる。
 こは、倭国造等が祖ぞし
 名を賜ひて、槁根津日子と号けたまひき。
 御先導申上げましよう
 津彦と云ふ名を賜わつた。
 此即ち、倭直部の始祖であるし
 といふ。(神武即位前紀参照)
 津彦と云ふ名を賜わつた。
 此即ち、倭直部の始祖であるし
 といふ。(神武即位前紀参照)

といふ。
 著出版へ早崎海峡参照
 師か、小舟に乗ってやってきた。
 太伯の後と自称する者達は、その男を召し
 寄せ、
 おまえは誰かし
 手ぶり身ぶりで尋ねた。
 私ば、珍房と申す者でございます
 おまえは、我等を先導することか出来る

①159^P

④160^P下

④161^P-3/4 写真⑤

634^P

大正 1914^年 皇軍

大正 1914^年 地形が入れ替わっている

皇軍 (みくさ) 3189^号
④194^号 11^号
④190^号 5^号

島と愛媛県佐田山半島とによつて挟まれた海峡)での類
似の出来事について、第六十四章へ神武天
皇の東遷の項において述べたい。

なのだらう、
んだ皇軍は、
に相当するところ、
上陸したと考えてみたい。

河内の東側、すぐのところには、南北に連ら
なる山々が縦横をなしている。

現在、その山塊は、南から北の方へ順に、
一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳、(六八四m)
一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳、(六八五m)
一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳、(六八五m)

と呼ばれている。(「荒筋」第二編において
既述) 第19巻 佐田山半島

曲浦、大きく曲っている有明海の、
弧を描き、滑るように入

大正 1914^年

長洲
地名錄

734

紀上128°8分

(元642°-2/2)

636°

紀上19°

紀上192°5分
「追み戦ふ」とある

井上(佐) 678°
紀上192°
紀下123°
あたはず

かいせん 大々大兵団同士の戦闘
会戦 小林496° 敵の戦うと

紀上12°

根国へ入ったようである。(神代紀上、第八
さした素多鳴尊は下熊成峯山に居て下
また後年、天上の国(邪馬台国)から追放
ない。熊岳の山中に籠ろうとしたのかも知れ
のちと自称する者達も一とリあえず一時
の同ぐく「閩越の東冶から東遷してきた太伯
の子孫達は、武夷山中に居住したのであろう
と思われぬ。
因みにあへると下
賊軍も、あえて追ひすからなかつた。
皇軍は、もうこれ以上進撃(進人)で攻撃す
る(こと)できず、引き返して船に戻った。
頼命の脇にあたりという非軍に見舞われた。
た。この戦いは激烈を極め、矢か、長兄五
ここに、敵と味方が出会ったの会戦となっ
とある。(*)

段一書第五参照。後述

⊗

の船
皇軍が和泉国の西北方の葦葦海に相当す

宇土半島の西北方沖あたりへやつてきた頃、五瀬
命の流矢の傷は非常に痛むようになってい

た。
五瀬命は、剣の柄頭を握りしめ、雄詰し

て、
残念だ。大丈夫でありながら、いやしい

賊の手にかかって傷を負い、復讐もできずに

死ぬとは、
と仰せられた。

なお、ボるには未だ少し時期尚早ながら、
後世の人々は、この葦牙(葦の若芽)

のようにな、そ、また男の「物」(チンボコ)のようにな

形を、
海と名付け、宇土半島の西北方の海を、茅葦の

水門(記)と呼んだのではなからう

紀上193⁵⁹
死(株)245⁵

小林585⁵
済ぬ たまった水

126¹ 紀上96⁶
637⁷

紀上193³

つかか
柄頭
たか271151¹
21496⁶

紀上192²



紀上194注4
みゆのむら 神邑 製鉄
⑤696-3/3

やむなく

639^P

はら 比喩65上
姥 柱 たおとみ
一家の柱

紀上193^末

ヤマトの 倭名抄 662^カ かねなが 1人の
1代 ⑤5959²⁰ 懐良親王

皇軍がさらに南下して、紀伊国に相当する地（倭名抄に八代郡肥伊とある）の空罪山（不明。八代神社あたりか）に着いたとき、五瀬命は軍中に豊死せられた。そこで、五瀬命を空罪山に埋葬した。（記
紀参照）
柱ともたのむ長兄を失った痛手は、あまりにも大きかった。五瀬命の死を悲しんでばかりは
お小なかつた。
この地の住人達から追立てられ、さらになお、南へ南へと降っていった。
た。
あてどなく流離う者達の姿は、あわれだった。
船は、薩摩半島をぐるりと廻って、神邑（新宮市新宮あたり）といわれ、今のかく、
た。
（新宮市新宮あたり）といわれ、今のかく、

みけ 2108 紀上194注1

紀上194

640^p - 1/2

さすらう 前17行

紀上194 4行

11行 624^pに 前104年東征開始
おむすにやうくと
やうとのことかろうじて

鹿見島市あたりかに着いた。(第165回参

照)

・それは、東征を開始した翌年(前一〇三)

の夏(六月)頃のことであった。(紀参照)

だが、この地も、皇軍を迎え入れてくれる

ところではなかった。

■ やむなく、いまた軍をへ引き返して、

漸に(のろのろと)進んでいった。

・船は、行く先の目当ても無く海に浮かび、

さまよい続けた。

■ と、そんなとき、海の中で突然暴風雨に巻

き込まれた。

・詳らかにでないものの、夏あるいは秋に襲

て来る台風だったのではなからうか。

■ 悪い事は、重なるものである。

「稲飯命と三毛入野命が、波にさらわれた」

という。(神武即位前紀参照)

(*)

全長 63^P

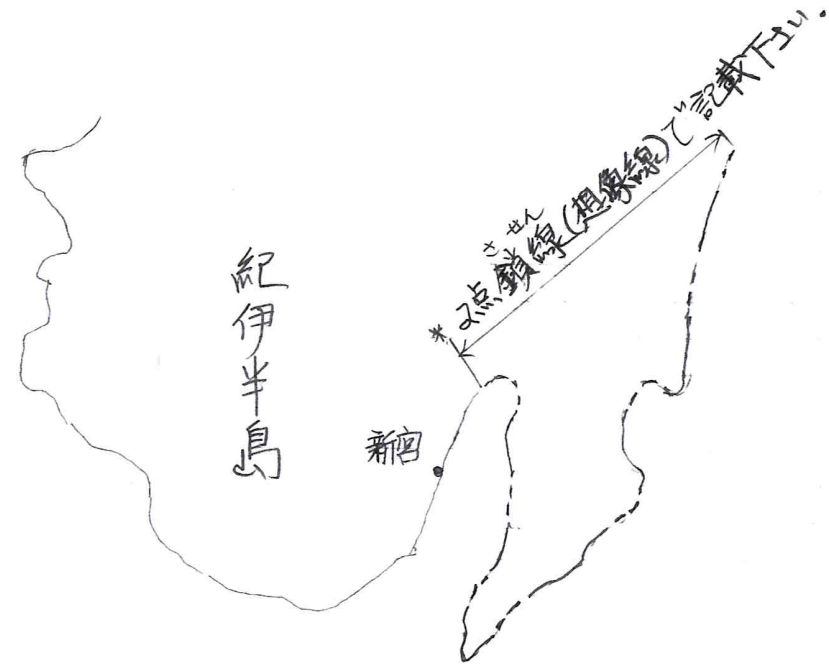
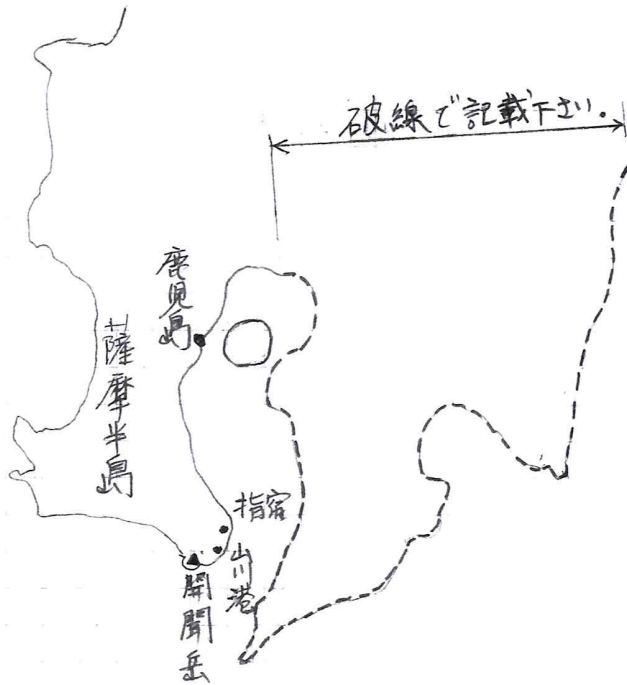
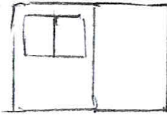
640^P 2/2

新詳高等地図 帝國書院 68^P

1/1,500,000

左頁の上半分に、左右の2図を並べて掲載下さい。

1/1,500,000



142^G

第165図 薩摩半島と紀伊半島との対比(想像)

開聞岳 641^p-3/
1907^p-2/5

・ 力うー

・ 右頁上半分

641^p-1/2, 6



カ
↓
ト

924m
「九州」ブルーカード
7.28
実業日本 218^p上

130G 140G 写真図版 115 ^{えい} 瀬佳町から見た ^{かい もんだけ} 「開聞岳」(924m)の北西面
『諸国名山案内』〔第8巻〕九州、^{あしかがたけぞう} 足利武三、山と溪谷社、1994年8月20日改訂第1刷、18頁参照
195

開聞岳 (海沿い) 1907 p. 3/5

通称「王の井」

641^p - 3/2

カラー
左頁の上半分



1409 写真図版 116 薩摩富士とも呼ばれる秀麗な姿の「開聞岳」(924m) ← 「九州」フルガイドブック 218頁 924m
1309
『日本100の神社』JTB 日本交通公社出版事業局 1988年11月1日発行 p. 155頁参照。

次頁14 毒氣 紀上194° 次頁13 17斤

642°

記号111°

紀上194°

山川地名辞1601・164° 和名抄677° 丹は井(2)を本とする大カマ43°

足に相対する 炬 133°

て力(ちから)を失(う)ったのだ(た)った。(紀参照)
・神(かみ)が口(くち)毒(どく)氣(き)を吐(は)いたため、人々(ひと)はすべ
掛(か)かっ(た)てきた。
■と(こ)ろがその直(ちか)後(ご)↑↑↑大(たい)変(へん)な災(さい)難(なん)が襲(おそ)い
消(き)え失(う)せ(て)ま(っ)た。
か(に)な(り)、や(が)て何(なに)事(こと)も無(な)か(っ)たか(の)よう(に)
・も(っ)と(も)、そ(の)光(ひかり)はす(ぐ)さ(ま)、ぼ(ん)や(り)と長(なが)く
小学館(しょうがくかん)へ熊(くま)参(さん)照(しょう)
で(あ)ろ(う)。(「記(き)し。漢(かん)和(わ)辞(じ)典(てん)」小林(こばやし)信(のぶ)明(めい)
や(か)に光(ひかり)るさ(ま)が一(いっ)瞬(しゆん)あ(た)り(を)照(て)ら(し)た(の)
する火(ひ)山(さん)が火(ひ)を噴(ふ)いて、大(お)き(な)日(ひ)熊(くま)口(くち)八(はち)鮮(せん)
■そ(の)人(ひと)な時(とき)、開(ひら)く岳(たけ) (薩(さつ)摩(ま)半(はん)島(とう)南(なん)東(とう)端(たん)に立(た)ち置(き)
宿(すく)郡(ぐん)山(やま)川(かは)村(むら)付(つけ)近(きん)に漂(ひら)着(ちやく)したのか(の)知(し)れ(な)い(ら)
・こ(こ)で、丹(に)敷(し)戸(こ)畔(は)と(い)う者(もの)を誅(ころ)した。
は、薩(さつ)摩(ま)半(はん)島(とう)南(なん)東(とう)端(たん)部(ぶ)ハ以(い)夫(ふ)須(す)岐(ぎ)の山(やま)川(かは)港(みなと) (揖(い)保(ほ)
敷(し)浦(うら)亦(また)の(な)は荒(あら)坂(さか)津(つ)へたど(り)着(つ)いた。(紀参(さん)照(しょう))
・定(さだ)か(で)な(い)が、印(いん)惠(え)命(めい)加(か)乗(の)っ(て)お(ら)れ(た)船(ふね)
■印(いん)惠(え)命(めい) (後(のち)の崇(すん)神(じん)天(てん)皇(わう))は、か(ろ)う(い)て丹(に)
足(あ)掛(か)り

ビツケ ビツケ } とみてもよい
 ビツキ ビツキ } 小林546
 毒気

記(連)III 在16

小林
586

644

么2319 大毛 = 酸化硫黄の毒の通称
 么14' x = 酸化炭素と違う 亜硫酸ガス 么74'

南端の地に留まっていた
 この記述は、
 軍は「あたかも病み伏し、たかのように」
 こんと眠り続けた。(記紀参照)
 毒気によつて憔悴し、仮死状態となつた皇
 があり、硫化水素は腐敗した鶏卵のような悪臭
 を持つ無色・可燃性の毒性気体である
 という。「広辞苑」へ火山ガスへ亜硫酸
 ガスへ硫化水素参照
 亜硫酸ガスは刺激性の臭気がある有毒気体で
 硫黄が大部分だが、他に亜硫酸ガス・炭酸ガス、
 水蒸気
 火山の火口から噴出するガスは、
 開闢岳が噴火した
 と記すわけにいかず「あえて曖昧な表現方法
 を採択したのだろう、と思われ。」

(*)

645^p

指宿の山川 642^p5行

というところを、
 はなかろうか。
 予水となく暗示してゐるの

すなわち、

皇子達は、
 指宿の山川港近傍に数年間留ま

り、
 実力を蓄えていたのだらう

と想像される。

(*)

こと

同文
⑤5928^P

セバツク2
懐良親王の生涯 102~4
地名辞 592^P

646^P
⑥651^P45~5年

大元「南北朝時代」

⑥656^P

【懐良親王】
時代があまりにも懸け離れていゝので、随分奇妙な感もあるが、―――以下、の事実と重ね合わせて考えてみたい。
【明院統】と後代、南朝へ大覚寺統と北朝（持皇子懐良親王を征西將軍として九州へ派遣した南朝の勢力回復の為、後醍醐天皇は、）
【こと】だつたとりう。（「懐良親王の生涯」坂井藤雄、葺書房、一〇一頁。以下、第19表参照）
【あ】る菊池や阿蘇へいきなり直行しようと思はれ、先ず四国の讃岐（香川県）に立ち寄り、その後伊予の忽那島（松山市の西北約二）
【り】て、その後伊予の忽那島（松山市の西北約二）

右頁上牛分に、
はみ出に大主と掲載下2.1.

1584 第19表 初代天皇と懷良親王の北進の年紀対比表

はつくにしらす天皇 (崇神天皇)			懷良親王	
神武紀 による紀元	新・やまと物語 における紀元	備考	西暦	備考
	(前 127)	会稽の東治を離れたか。	1336	比叡山を出発。
前 667	(前 104)	富建近防の島から東遷開始か。	1340 後 (1339年末かともいう)	伊予の忽那島を出発。
前 666	(前 103) 夏	丹敷浦 (荒坂津) 着。	1342	5月、薩摩半島最南端の「薩摩の津」 (山川港) 着。
前 665	(前 102)		1343	
前 664	(前 101)		1344	
5年 前 663	(前 100)		5年 1345	
前 662	(前 99)		1346	
* 前 661	(前 98)	北進開始か。	* 1347 末	薩摩から北進を開始。八代着。
1年 前 660	(前 97)	1月、 檀原宮で即位。	1年 1348	1月2日、宇土津着。 4月、菊地に征西府を置く。

才1巻
未定
前667年
東遷開始

647^p

紀元580^p 補注3-18 前660年辛酉年即位
660 15行
1284
* 第一巻程の『日本書紀』年末参照。

★18巻 538-2/2

(注) 5928-2/2 に同表

5928-2/2 と同一

202^p

202

懷良親王の生涯 105^pに原文有
5928^p, 5929^p

648^p

5928^p

懷良親王の生涯 102~4^p
地名 592^p

5928^p 版

藤雄、其書房、一〇四、五頁参照	弘文館、一六六頁。懷良親王の生涯に坂井	入城した。(「菊池三代」杉本尚雄、吉川	隆信の「初」 ^{52^p} 「谷山城」(鹿見島市の南約九 ^{ロキ})へ	カというに至った。	三四二)五月一日、薩摩の津(山川港説加有	う「たわけ」か懷良親王は、阿蘇へ向かわす下	上陸 ^{いりり} 佐伯から西行すればすぐ阿蘇なのだか、とい	の地盤 ^{かぬなが} となった。	後 ^う この当時、目指す九州地方の大方は、武家	の ^{ロキ} の中鳥を主鳥とする七つの鳥々へ居を
-----------------	---------------------	---------------------	--	-----------	----------------------	-----------------------	--	---------------------------	------------------------------------	-----------------------------------

74129^b

時 刻 ⑤⑥ の機会好戦「-が来る符号」

阿蘇
手のかた
11頁 59
5931^p

居所を紛らわしくする為なめたろう
 懐良親王は、薩摩の津に居たり、谷山城に拠
 たりながら、肥後国へ向かう時機をうか
 かうのだった。へ「熊本県の歴史」森田誠一
 山川出版社、一〇五頁参照）
 懐良親王は、時至ったならば、薩摩から一
 気呵成に「太陽を背にして」北進し「肥後
 国へ入るつもりだったのであろう。
 懐良親王は、薩摩に居住すること五年、
 三三七の暮に薩摩半島西岸沿いの海域を
 北上、八代でいったん上陸した。
 宇土半島を迂回して佐吉の津（網津村大字
 笠岩）を経、翌年の正平三年（一三四八）正
 月二日に宇土津へ着いた。懐良親王は、同月十
 四日に宇土津を後にして東行、御船城へと至
 った。
 懐良親王は、御船城に一兩日逗留し、阿蘇
 惟時、惟澄らと会い、この後――北朝元

650^p

1348
1336
12年目

1348
1336
12年目

5917^p 13年目 菊池郡 190°
5931^p 13年目 熊本県 105°
1224

県の歴史し森田誠一、山川出版社、一〇五頁
「菊池郡誌」名著出版、一九〇頁参照。第九
十七章において詳述)

(*)

の川尻(川尻幸俊)を避けて菊池にたどり着
いた。
[] こうして懐良親王が菊池市中心部の隈府に
に征西府を置いたのは、その年(一三四八)
の四月であった。
[] それは実に懐良親王が延元元年(一三三
六)に比叡山を出発して以来十三年目(現代
の数え方では十二年目)にあたる。
[] そうしてこれより以後、約十年間「
は南朝方の拠点とされたのだった。(「熊本
なんかうがた きよん」)

なぞるに1659 年紀 1733

651P

ニイ 故事 1793 大昔あった事柄

12.5 GM

北上

北上

(*)

北上さめたのだらう、と想到さへる。
 懐良親王は、薩摩から、
 初代の天皇の事績を忠実になぞり、
 進人の年紀について、対比してみよう。(第19
 表参照)
 懐良親王が薩摩に居られる
 といふそれだけで、十分励みになつたと思わ
 れる。
 九州北部一帯の政治情勢に大きく影響すると
 も思ふな。薩摩に、それほど長期間滞在さへ
 たのだらうか。(九州南部の)
 懐良親王は、日本初代天皇の
 故事にならつて、五年間薩摩に留まつて
 おられたのかも知れない。
 仮りにしもそうだとすれば、九州の南朝
 方にとつては、
 懐良親王が薩摩に居られる
 といふそれだけで、十分励みになつたと思わ
 れる。
 進人の年紀について、対比してみよう。(第19
 表参照)
 懐良親王は、薩摩から、
 初代の天皇の事績を忠実になぞり、
 進人の年紀について、対比してみよう。(第19
 表参照)

660°
確認できないもの

⑤ のの 660° 14分

④ かなた
新武式馬の力 記133°

大毛投馬
「活山島」とある 652°

579°
大毛

太陽を背にして

~~ト~~ ~~ル~~ ~~ま~~ ~~る~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~か~~ ~~で~~ ~~な~~ ~~い~~ ~~も~~ ~~の~~ ~~の~~

域で、五年間、武力を蓄えることに総力を注
印恵命(後の崇神天皇)は、薩摩半島南郡

かれた
と解いてみたい。

(1) 太伯の後と自称する印恵命ら倭人達は、

つ頃からか、神邑(鹿見島市あたり)
をも手中に収めて統治するようになった

(2) 倭人達は、鹿見島湾内の活火山島、桜島
を間近に望めるその地を特に神聖視して
日神邑と呼んだのかも知れない

などと想像される。

はるか北方(九州北半部)の動静にいつと

耳を立すると

天つ日つぎの大業をなすべき

絶小 125° 14分

次々 6分

紀小125° 天1272° → 紀上196° 御幸者」とある
「天皇大神」とある

653P 版 661P 711 同文 131-2/6

史記(漢)上38° 三〇表Ⅲ 332° 昔とある

天経2222° 頭ハ咫鳥
紀上196° ハ咫鳥とある
記(四)113

時 ^{とき} がや ^や つてきた ^{きた} ✓	よう ^{よう} だ ^だ 。	■ある ^{ある} 夜 ^よ 、印 ^{いん} 恵 ^え 命 ^{めい} は、	に ^に いる ^{いる} という ^{いう} 三 ^{さん} 本 ^{ぽん} 足 ^{そく} の ^の 赤 ^{あか} 色 ^{いろ} の ^の 鳥 ^{とり} の ^の 夢 ^{ゆめ} を ^を み ^み ら	れた ^{れた} 。	※因 ^{ちな} みに ^に 求 ^{もと} へ ^へ ると、	て、赤 ^{あか} い ^い 火 ^ひ の ^の 大 ^{だい} 陽 ^{よう} が ^が 、	から ^{から} 上 ^{じやう} 流 ^{りゅう} (西 ^{せい})へ ^へ 移 ^{うつ} り、	て、武 ^ぶ 王 ^{わう} の ^の 陣 ^{じん} 屋 ^や の ^の 前 ^{まえ} ま ^ま で ^で 来 ^き ると、	た ^た 。赤 ^{あか} は、	と ^と いう ^{いう} 。	中国 ^{ちゆうごく} の ^の 古 ^こ 典 ^{てん} シ ^し リ ^り ス ^す 、	頁 ^{えい} 注 ^{しゆ} 六 ^{ろく} で ^で 三 ^{さん} 国 ^{こく} 志 ^し と ^と 吳 ^ご 書 ^{しよ} 、	天 ^{てん} を ^を あ ^あ ま ^ま ね ^ね く ^く 照 ^{てう} ら ^ら す ^す 大 ^{だい} 神 ^{しん} は、	て、こ ^こ う ^う 仰 ^{おほ} せ ^せ ら ^ら れ ^れ た ^た 。	■私 ^し が ^が い ^い ま ^ま ハ ^ハ 咫 ^た 鳥 ^{かうす} を ^を 遣 ^{はな} わ ^わ す ^す か ^か ら、	導 ^{どう} 者 ^{しや} と ^と す ^す る ^る か ^か よ ^よ か ^か ら ^ら う ^う と ^と ハ ^ハ 咫 ^た 鳥 ^{かうす} が ^が 、	は ^は た ^た し ^し て、
		ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} は、	の ^の 太 ^{たい} 陽 ^{よう} の ^の 中 ^{なか}		周 ^{しゅう} の ^の 王 ^{わう} 室 ^{しつ} の ^の 勃 ^{はく} 興 ^{きやう} に ^に 先 ^{さき} 立 ^た つ	が、	そ ^そ ー ^ー の ^の ち ^ち 下 ^{くだ} つて ^て き	赤 ^{あか} い ^い 鳥 ^{からす} にな ^な つ	周 ^{しゅう} の ^の 色 ^{いろ} で ^で あ ^あ る ^る	ハ周 ^{しゅう} 本 ^{ぽん} 紀 ^ぎ ✓。	史 ^し 記 ^き 上 ^{じやう}	平 ^{へい} 凡 ^{ふん} 社 ^{しゃ} 、	印 ^{いん} 恵 ^え 命 ^{めい} に ^に 教 ^{おし} え	を ^を 遣 ^{はな} わ ^わ す ^す か ^か ら、	ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} を ^を 遣 ^{はな} わ ^わ す ^す か ^か ら、	ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} が ^が 、	
		ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} は、				黄 ^{わう} 河 ^が の ^の 下 ^か 流 ^{りゅう} (東 ^{とう})	そ ^そ ー ^ー の ^の ち ^ち 下 ^{くだ} つて ^て き	赤 ^{あか} い ^い 鳥 ^{からす} にな ^な つ	周 ^{しゅう} の ^の 色 ^{いろ} で ^で あ ^あ る ^る	ハ周 ^{しゅう} 本 ^{ぽん} 紀 ^ぎ ✓。	史 ^し 記 ^き 上 ^{じやう}	平 ^{へい} 凡 ^{ふん} 社 ^{しゃ} 、	印 ^{いん} 恵 ^え 命 ^{めい} に ^に 教 ^{おし} え	を ^を 遣 ^{はな} わ ^わ す ^す か ^か ら、	ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} を ^を 遣 ^{はな} わ ^わ す ^す か ^か ら、	ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} が ^が 、	
		ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} は、				黄 ^{わう} 河 ^が の ^の 下 ^か 流 ^{りゅう} (東 ^{とう})	そ ^そ ー ^ー の ^の ち ^ち 下 ^{くだ} つて ^て き	赤 ^{あか} い ^い 鳥 ^{からす} にな ^な つ	周 ^{しゅう} の ^の 色 ^{いろ} で ^で あ ^あ る ^る	ハ周 ^{しゅう} 本 ^{ぽん} 紀 ^ぎ ✓。	史 ^し 記 ^き 上 ^{じやう}	平 ^{へい} 凡 ^{ふん} 社 ^{しゃ} 、	印 ^{いん} 恵 ^え 命 ^{めい} に ^に 教 ^{おし} え	を ^を 遣 ^{はな} わ ^わ す ^す か ^か ら、	ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} を ^を 遣 ^{はな} わ ^わ す ^す か ^か ら、	ハ咫 ^た 鳥 ^{かうす} が ^が 、	

旧字 11 上 君のみにて
印 更 命
紀上 196⁶

$\delta\gamma$ (L) まれ $\delta\gamma$ 196° 6分
 $\odot 626^\circ - \frac{1}{2}$
 $\odot 668^\circ$
 $\odot 734^\circ$
 $\odot 656^\circ$
 $\odot 1841^\circ$ 小E斗 23 次 2分
 $654^\circ - \frac{1}{2}$
 $196^\circ 6分$

コクヨ ケー20 20×20

親交もあつたから、薩摩半島南端部からハ
代・宇土地方へ到る難路を容易に快進撃で
またのたろう✓
と観察される。
■なお「神武記」によると、
「大久米は、入墨をしていて、目が鋭く見
えた」といふ。
かいたら、(大)久米とは、軍人
うか(要検討)
米をーてまた
みつみつし 久米の子らが
垣下に植る 一はみみ 口ひびく
痛手は私にさしこまれ 撃ちて止まむ
と神武記中に歌われていた 久米の子らは
ーーーすなわち、鹿見島・宮崎地方の然
称である日向国の日向健児のことであり、
日向健児が建国の主力軍になったのだ、と原
口虎雄氏はいう。(「鹿児島県の歴史」原口
虎雄、山川出版社、一五頁。神武記。神武紀

H18.12.27

シヨウガのサンショウ

版13行

絶交書 46
前 1816 シヨウガのサンショウ 655P-1/5

2人15
大塩山椒

華と鞍は香気と辛味

大塩臥薪嘗胆
記(出)118P

H18.4.26

日本列島へやってきた日倭人達にも同様に、
*すなわち、中国の江南地方の人々だけでなく、
か。日椒(さんしょう)や写真図版117・118参照
と思われ。魏志倭人伝中の日薑(しょう)も
行なつて復を忘れないようにしていた
*言(い)添(そ)える。この御歌は、日臥薪嘗胆(か)中
の「嘗胆」(えつおうこうせん)越王勾践(えつおうこうせん)が苦(た)い胆(き)を時々(ときどき)なめて
報復(ほうふく)を忘(わす)れまいとした故事(こと)を(図)想起(そうき)させ
る歌である。
*江南地方(きんなん)「吳(ご)および越(えつ)地方」の広い範囲(はんい)の地域(ちいき)
に住(す)む人々(たがひ)は「
へ薪(まき)の中に臥(ふ)し、あるいは苦(た)い(辛い)もの
ものを口(くち)にして身(み)を苦(くる)しめ、敵討(かたきう)ちを忘(わす)
れない(ように)務(と)める」
という苦行(くぎやう)を「伝統的(でんとうてき)な慣わし(なう)として受け継(つ)
いでいたのだらうと推察(すいさ)さめる。
*つまり、太伯(たいはく)(吳王(ごおう))の後(のち)と自称(じく)する倭人(わじん)
達は「
へ臥薪(か)のみなならず嘗胆(しょうたん)(嘗薑(しょう)・嘗椒(しょう))も
行(おこ)なつて復(ほうふく)を忘(わす)れないうにしていた
か。日椒(しょう)さんしょう)や写真図版117・118参照
と思われ。魏志倭人伝(ぎしわじんでん)中の日薑(しょう)も
行(おこ)なつて復(ほうふく)を忘(わす)れないうにしていた
*言(い)添(そ)える。この御歌(ぎょか)は、日臥薪嘗胆(か)中
の「嘗胆(しょうたん)」越王勾践(えつおうこうせん)が苦(た)い胆(き)を時々(ときどき)なめて
報復(ほうふく)を忘(わす)れまいとした故事(こと)を(図)想起(そうき)させ
る歌である。
*江南地方(きんなん)「吳(ご)および越(えつ)地方」の広い範囲(はんい)の地域(ちいき)
に住(す)む人々(たがひ)は「
へ薪(まき)の中に臥(ふ)し、あるいは苦(た)い(辛い)もの
ものを口(くち)にして身(み)を苦(くる)しめ、敵討(かたきう)ちを忘(わす)
れない(ように)務(と)める」
という苦行(くぎやう)を「伝統的(でんとうてき)な慣わし(なう)として受け継(つ)
いでいたのだらうと推察(すいさ)さめる。
*つまり、太伯(たいはく)(吳王(ごおう))の後(のち)と自称(じく)する倭人(わじん)
達は「

- ・カラー
- ・左頁の右と
(1/4頁)に、
はみ出して大きく
掲載下さい。
- ・色が 薄くならない
ようにお願いいたします。

655^p-2/5



根茎

13Q4

14Q4

写真図版 117 薑 (しょうが)

『原色学習ガイド図鑑』花・作物、学研、1981年9月1日(34刷)発行、121頁参照。

・カラー

・左頁の左上
(1/4頁)に、
はみだして
大きく掲載
下さい。

655^p-3/5



複総状花序

サンシヨウ ♀ 花4~5月

おしべは5本

213

植物大辞典 46頁2行



かむとからい

とげはむかいあつてつく

実9~10月

サンシヨウの果実

14a9

写真図版 118 標⁽¹⁾又 (さんしょう)

13a9

『原色学習ワイド図鑑』樹木・果実 学研 1981年9月1日(34刷)発行 65頁参照

植物大辞典 (1/4頁・5行) の写真 655^p-2/3

次頁から

655¹-4/5

千中に収める
652¹ 12斤

654¹-1/2 日臣命

定めてないか ありは 652¹ 9斤
もかいたる 654¹-2/2 新頁 2-3行
新からでないもの 652¹ 4斤

と解さる。
ま^{かい}つた

宇土地

方

を

あ

っ

と

い

う

間

に

奪

い

取

つ

て

い

宇土地

半島

以南

南

一帯

(八代)

今日

臣命

(大伴氏)

の祖

が

率

いる

皇軍

は

々

こう

いて

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

て

と

い

う

こ

と

な

の

か

み

ら

を

植

え

た

✓

い

。

い

。

い

で

あ

る

う

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

へ

倭人

達

の

屋敷

の

垣下

に

倭人

達

の

嗜好品

。

。

。

。

。

。

。

。

木

明

ら

か

で

な

い

か

久

米

の

子

ら

(

卑

人

ら

)

か

々

で

あ

ら

う

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

日

臣

新

ら

や

日

嘗

胆

ら

の

風

習

を

継

承

一

て

り

た

の

日

臣

新

ら

や

日

嘗

胆

ら

の

風

習

を

継

承

一

て

り

た

の

日

臣

新

ら

や

日

嘗

胆

ら

の

風

習

を

継

承

一

て

り

た

の

「ヒトあり」 655P 2行

つ割
すめち
655P 5/5

おそ
恐く

前頁

察するところへ九州北部（福岡・佐賀あたり）を本拠地とする箕子達は、東の拍奴国（中国・近畿地方）との戦いに注意力を奪われ、さらに朝鮮半島南端の領有地堅持の爲にも多大の兵力を割かなければならなかった。たのて、箕子達が統治している百余国中の極南界（八代・宇土地方）について、ついつい、心配りか疎かになつていた。と想到される。要するに、箕子達の本拠地から最も遠い極南界（八代・宇土地方）は、未だあまり重要視されておらず、防備も不充分だった。の

印恵命は、箕子の兵達が東国へまたは北進の国と教へていく戦つてい隙を狙つて、北進の政策を敢行されたのかも知れない。何にせよ、皇軍の大勝利だった。

において述べたいところ
タイロ 3068°-1/2
3107°

タイロ 646°

656°-1/2

タイロ 648° 11分

版 585° 小 30° 上段
848°
673°

設馬 吉田久米那珂
研究史和馬台口末尾の表

この戦勝の報は、ただちに、九州最南端部の
の口投馬国に設馬国・殺馬国の誤りで薩摩
国のことであらうと、吉田東伍氏・那珂通世
氏・久米邦武氏はいう。で待っておらるる印
恵命のもとへ伝えられた。〔魏志倭人伝〕
研究史和馬台国に佐伯有清、吉川弘文館、
二ハ七頁の表参照〕

(*)

印恵命は、薩摩半島西岸沿いの海域を船で
北上し、ハ代に地球磨川河口の岸に
に上陸されたのではなからうか。〔第七章
懐良親王〕参照、第五十六章において詳述

〔もともとは黄河流域に住んでいた〕太伯の
遙かな子孫に印恵命は、球磨川河口の岸に
に上陸された。〔第五十六章において詳

と考えてみた。〕

大分1469
猪 漢コシ
ワルカシ

「ウドガン」とある
地籍228
お呼び寄せになる
656P-1/2

656P-1/2

高等地図九州山脈
17人1人
険峻 2710

西134
紀上196

印恵命は、指揮官の日臣命を^いと^えの^みこと^と、
「おまえは、忠誠と勇武をかね、またよく
先導の功をたてた。よって、おまえの名を改^{あらた}
め、道臣としよう」と仰せられた。
ハ代二帯は、まさしく天府の土地（天然の
要害）と呼ぶにふさわしいところだった。
東方に険峻な九州山脈の連峰が聳え、北に
宇土半島の山々があり、西に天草島（上島お
よび下島）が連なっていて、いわば自ずか
ら要塞の地となっていた。
■時に、印恵命は、兄猪・弟猪（記には兄宇
迦斯・弟宇迦斯とある）を召された（お呼び
寄せになった）
■この兩人は、菟田（宇土か）の魁帥（首長）
であつた。
■*宇土郡は、ウドグンとも
称される。（「帝国地名辞典」太田為三郎、
「宇土郡」参照）

西950

紀上196
89

おおくめ 記(馬)115° 記(馬)115°
大久米 ⑤654-1/2 害か兄猥に
21688° ⑥655-1/2 兄上197°

尾 幸 情状を視察するに 兄上196°
657° 未259° 備へたまへ

兄小126°
兄上196°

握りしめて、弓を引き絞って、威嚇しなから追
おまえ自身が入った。おまえが造った建物に
う言つた。いや。奴よ。おまえが造った建物に
と。知ると。大いに怒り。大音声に責めてこ
め。道臣命は、間諜になく兄猥に逆心がある
と。道臣命は、印夷命は、その謀反の状況査察のた
と。言つた。えうか、この詐欺があることをおこ
備えう。小ますように。リ(仕掛け)を設け、郷
え。て。陥水ようと考えております。の。新宮
ない。と。恐れ、ひそかに伏兵をおき、仮り
も。つとも。正面から戦ったのではとても勝
「私の兄、兄猥は、反逆を企てています。
弟猥は、軍門を拜して申し上げ」
ところか、兄猥の方は来なかった。
構(かま)り

H29(2017)12.28~28(日)

下

うちのあそびとこみ
あ656-2/2 芝田 殿の殿師 紀上196
17行

行 あえて北の662の3 紀上115 大殿とお
658

行 656-2/2 14行
前6 行 656-2/2 14行
コシとある

記(出) 紀上196
114~115

な い。 ⑧

な どのと 想像さめるが、
確 認 する 手 立ては

よ ひ 副 官 だ っ た の で は な か ろ う か

さ れ、 宇 土 地 方 一 帯 を 治 め て い た 地 方 官 へ お

人 兄 猾、 弟 猾 は、 箕 子 達 の 国 の 都 か ら 派 遣

ひ よ っ と 一 た ら

と 理 解 さ れ る。

猾 川 迦 斯 と、 箕 子 と は、 可 成 り 似 て い る。

（ 機 械 ） さ え 作 る 高 度 な 技 術 か も 持 っ て い た

仕 掛 け を 踏 め ば 圧 死 す る よ う な 構 造 の 機 械

宮 殿 や 殿 宇 と 称 さ れ る ほ どの 宏 壮 な 殿 舎 を

な お、

（ 紀 ） 迦 斯 （ 記 ） 庫 は、 新

踏 み、 圧 死 一 て 一 ま っ た。

（ 神 武 即 位 前 紀 ）

兄 猾 は、 自 業 自 得 で 言 い の が れ よ う も な く

と う と う 自 分 で 作 っ た 機 械

（ 神 武 即 位 前 紀 ）